

2021 年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B4H001

氏名： 吉永 安里

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目：幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続―読むことの指導の差異と連続性から―

論文審査委員： （主査） 仲本 美央
（副査） 福丸 由佳(指導教員)
（副査） 宮田 まり子
（副査） 無藤 隆

1. 論文内容の要旨

1 問題と目的

近年、グローバル化に伴う教育の国際競争が加速化する中、幼児教育と小学校教育の接続、いわゆる幼小接続カリキュラム政策が教育改革の主題として浮上している（福元，2014）。平成元年の小学校学習指導要領の改訂においては、小学校低学年児童の発達と幼児教育との連続性に配慮した、直接体験と総合的な指導を重視する生活科が導入された。幼児教育側も、同時期に幼保共に、3歳以上の幼児に対し、環境に関わって展開する具体的な活動を通して5領域のねらいが総合的に達成されるような指導が重視されるようになった。つまり、接続の時期となる幼児期から小学校低学年にかけて子供の発達に即した、環境を通した直接的な体験と総合的な指導を行なうことにより、連続性・一貫性のあるカリキュラムを確立しようとしたのである。

一方で、幼小の見通しをもった教育課程の編成・実施を実現するために、一部の自治体や学校園は様々な連携や接続の取り組みを行ってきたが、多くの学校園では、子供や保育者・教師の交流に比べ、教育課程の接続が十分とはいえない状況にあった（文部科学省, 2016）。また、円滑な幼小接続のあり方を検討する研究が少しずつ現れてきたものの、幼児教育と小学校教育どちらかの立場による研究に偏っていたり（松寄，2017）、幼小の要領・指針や保

育・授業記録の分析のような資料研究が主であったりという問題が指摘されてきた。齊藤（2017）は幼小双方の教師による検討のプロセスを経た、事実裏打ちされた、そして子供の実態把握から創りあげられるボトムアップによる新たな教育課程編成が実現されることが今後の課題であるとしている。

こうした状況の中で、小学校でスタートカリキュラムの策定が義務付けられ（文部科学省，2017）、幼児期における学びと育ちを大切にしたい小学校教育への円滑な接続を図る、事実裏打ちされた、子供の実態把握に基づく教育課程の策定と実施が喫緊の課題となっている。

そこで、本研究では、幼児教育、小学校教育の双方の実践を観察し、教師の指導と子供の実態を詳細に分析することを通して、得られた知見をもとに、幼小の連続性・一貫性ある読むことの指導のあり方を提案すること、さらには、齊藤（2017）の指摘する事実裏打ちされた接続の時期のカリキュラムの提案をすることを目的とした。

本研究の課題の一つ目は、幼小の実践のどの領域・教科に焦点を当てて検討するかという点である。この点に関しては、領域－教科の幼小双方の実践を分析した研究自体がまだまだ少ないが、これまで教師の指導や子供の実態把握が十分なされておらず、幼児期と学童期でその段差が指摘され（岡本，1985・1995）、かつ小学校以上のあらゆる学習の基礎となり幼小共にその育成が喫緊の課題となっている言語能力育成の核となる領域「言葉」と小学校「国語科」の接続に着目した。特に、幼児期と学童期の言葉の差異を有機的に接続させ、小学校以降の読みへつなぐ言語活動として重要な役割を果たす可能性が示唆される読み聞かせ（住田，2015；藤森・吉永，2019）と、小学校の読むことの指導のつながりに着目し、これまで幼小それぞれで蓄積された研究の知見を踏まえつつ、幼小の読むことの指導にそれぞれどのような特徴があるかを明らかにし、その接続のあり方を検討する。

二つ目は、幼小双方の実践をどのような視点で分析するかという点である。本研究では、環境構成と指導内容の2点に焦点を当てることとした。環境構成は、幼児期の教育の方法として幼稚園教育要領等でも強調されているが、高山（2014）は、環境構成は人・自然・物・空間・時間等の環境を保育者が意図的に選択し構成する行為であり、読み聞かせ場面でも環境構成が重要であると指摘している。小学校入門期においても安心感のある学びの環境が重要であることが示唆されているが（齋藤・石田・浅見，2019）、Daniels, H.（2001）は、学校における教育実践の分析は教師と子供間の言語的コミュニケーションに偏っており、非言語的人工物も含めたより広い記号形式による分析が教育実践を理解する上で有益であると指摘する。このため、読むことの指導を環境構成という視点から幼小双方の読むことの指導場面の分析を行った。

また、Daniels, H.（2001）が指摘する通り、これまで教師や子供の読み聞かせや読みの指導においては、教師や子供、あるいは双方の言語的コミュニケーションの分析も重視されてきた。子供の読みの力の芽生えを伸張するにあたっては、大人の指導的な発話が重要であり（Choi, 2000）、交流型の読み聞かせにおいては、教師からの発問の投げかけだけでなく、聞き手である子供から自然発生的に表れるものを大切にすべきだと指摘される（足立，2014）ことから、幼小の読むことの指導場面でどのような教師の指導的な発話（発問）が見られるか、また子供の読みの力の実態を把握するためにも、子供が何に着目して読んでいるのか、

子供からの問い・気づきの何を教師が取り上げて読みの指導内容としているかについても分析の対象とすることとした。加えて、伊藤・玉瀬（2020）は、読み聞かせは、読み手と聞き手、聞き手同士が様々に関わりあうインタラクティブな活動であると示唆していることから、教師と子供の読みに関する発話のやり取りの方向性にも着目し、幼小双方の読むことの指導場面の分析を行った。

2 論文の構成と内容

本研究の構成と内容は以下の通りである。なお、研究1～研究3では、幼稚園と小学校の読むことの指導場面を自然観察法により調査し、指導場面のVTR撮影と教師への半構造化面接を行った。倫理的配慮として、2013年以前の事例に関しては、教師については依頼状ならび同意書により、子供については園及び学校を通して保護者の承認を得て行った。2014年以降の事例に関しては、白梅学園大学・短期大学「人を対象とする研究」に関する研究倫理審査委員会の承認（承認日：2015年11月30日 承認番号：201512）を受け、教師及び子供の保護者の同意を得て行った。

第1章 これまでの研究の動向と本研究の目的

第1章では、先行研究と研究の目的について扱った。1では、「幼小接続研究の動向」について述べた。幼小接続研究の背景および幼小接続研究、幼小接続期における言葉の育ち、幼児教育における読み聞かせと小学校入門期の国語科「読むこと」の指導についての先行研究の知見を整理した。2では、1で整理した先行研究の知見を踏まえ、本研究の目的と構成についてまとめた。

第2章 <研究1>『おおきなかぶ』にみる幼小の読むことの指導の検討

第2章では、幼稚園、小学校1年生双方の教師を対象に、同一教材『おおきなかぶ』の指導場面を観察し、併せて教師へのインタビュー調査を行うことを通して、幼小の読むことの指導の差異と連続性について検討した。幼稚園の読みの環境構成においては、教師と子供同士、子供と共同テキストである絵本との身体的・物理的近接性が見られ、子供が安心感・一体感をもち、共同注意を向けやすい読みの環境構成となっていることが示唆された。また、読みの指導内容として、子供の問い・気づきを取り上げて読みが展開する子供起点波及型のやり取りが多く見られること、教師の発問の量や種類が小学校と比較して少ないことが明らかとなった。教師の発問や子供の問い・気づきの種類はテキストに明示されている場面の様子や登場人物の行動、人物・場面設定、生活経験に関連するものが多く、想像を広げて読む楽しさが重視されていた。小学校の読みの環境構成については、教師と子供同士の位置関係が遠く、個別テキストである教科書や多様な教材・教具が用いられており、物理的な実態のあるものへの共同注意ではなく、観念上の共同注意を向けねばならぬ難しさがあることが示唆された。読みの指導内容は、教師起点直線型のやり取りが多く見られ、教師の発問の量や種類が幼稚園と比較して多く、子供の問い・気づきについては見られない事例もあった。教師の発問や子供の問い・気づきの種類は推論が必要とされる登場人物の気持ちやテキスト全体を俯瞰するあらすじや展開に関するものなどが見られ、指導範囲が広がったり、見通しをもった自覚的な読みが重視されるようになったりするなど、幼児教育から小学校教育への系統性が見られた。

第3章 <研究2> 幼小の読むことの指導についての長期的視点からの検討

第3章では、幼稚園の就学前の3学期と小学校1年生の1年間の長期的視点から、読むことの指導の変容について検討した。幼稚園の読みの環境構成においては研究1と同様、教師と子供同士、子供と絵本との身体的・物理的な距離が近いことが明らかとなった。また、読みの指導内容では、子供の問い・気づきを起点とするやり取りが多く見られる一方、研究1と比較すると教師の発問が多く見られた。教師の発問の種類や子供の問い・気づきの種類はテキストに明示されている場面の様子や登場人物の行動、人物・場面設定、生活経験に関連するものが多く、研究1の年少から年長の2学期までの事例と比べると種類が増え、読みの指導範囲が拡張していた。さらに、想像を広げる読みが重視される一方、チャプター・ブックを章ごとに読むなど、前章の振り返り、本時の章への着目、次章への期待という見通しをもった自覚的な読みが行われるようになることが示唆された。小学校の読みの環境構成は研究1と同様、教師と子供同士の位置関係が遠く、個別テキストである教科書や多様な教材・教具が用いられていた。また、読みの指導内容として、教師の発問を起点とする直線型のやり取りや教師の発問の量や種類が多いこと、一方で子供の問い・気づきが少ないことが明らかとなった。また、教師の発問や子供の問い・気づきの種類は幼稚園と共通のものに加え、推論が必要なものが増えるなど指導範囲が広がり、前時の学習、本時の学習、今後の学習に関する見通しをもった自覚的な読みや、根拠をもって読むことが重視されるという幼児期から小学校への系統性が見出された。研究2の幼稚園の事例では、小学校の教科書のように個別のテキストが用いられたり、教師からの発問も多くなったりするなど、幼小の読むことの指導に重層性が見られた。一方で、環境構成の違いから、幼稚園では物理的実体のある対象へ、小学校では個別テキストの同じ箇所や他の子供の考え等、観念上の対象へ注意を向けねばならないなど共同注意の抽象度に差異が生じていることが推察された。そうした差異は段階的に起こるのではなく、小学校入学時に一転し、1年間を通してほぼ変容しないことが明らかとなった。

第4章 <研究3> 幼小の読むことの指導における今後の発展に向けての実証的示唆としての多文化比較

第4章では、アメリカ、ベルギーの幼児教育施設、小学校の読むことの指導場面と教師へのインタビューの分析を行った。日本とは異なる文化的見地からその差異及び共通性を明らかにし、第2章・第3章で明らかとなった日本の指導と比較し、日本の幼小の読むことの指導の特徴を明確にした。アメリカやベルギーの読むことの指導では、アルファベットの特徴である発音と文字の対応の難しさから、「ボトムアップ(発音や文字・単語の綴り)」から教える音韻意識の指導にも重点が置かれている様子が見受けられた。アメリカの幼小で特徴的に見られた読み聞かせを用いたトップダウン(テキストから文字や音)の指導においても、子供自身が問いを立てて読む技術や、叙述を根拠に推論する技術など、言語技術(language arts)を習得させる指導意図が明確であった。一方、日本では登場人物や場面設定、場面の様子や登場人物の行動のような基礎的事項は幼小共通して指導され、そうした基本的事項を押さえながら登場人物の気持ちについて想像を広げたり、物語に対する感想をもったりするような、情緒的な読みも指導する日本の幼小の読むことの指導の特徴が明らか

となった。

第5章 まとめと今後の展望

第5章では、総合考察と今後の展望についてまとめた。1の総合考察では、研究1～3の研究で得られた知見について読みの環境構成と読みの指導内容の2つの視点から接続の時期の読むことの指導のあり方を考察し、接続の時期の読むことの指導の試案（表参照）を提出し、本研究の意義をまとめた。2では本研究の課題と今後の展望について述べた。

本研究の意義として、第一に、同一教材の校種間比較、長期的視点からの検討、多文化比較を通して、幼児教育と小学校教育双方の読むことの実践における日本の教師の指導の特徴や子供の実態を明らかにできたことが挙げられる。第二に、読みの環境構成と読みの指導内容の2点から、幼小の読むことの指導の特徴を明らかにしたことである。読みの環境構成では、教師と子供、共同テキストの身体的・物理的近接性が、子供に安心感と一体感をもたらし、物理的な共同注意を向けたり、言語獲得や物語理解をしたりしやすいこと、読みの指導内容では、子供同士の発言がつながり合って学びが展開する子供起点波及型や教師起点波及型、子供の問い・気づきを生かした指導が重要であることが示唆された。さらに、教師の「自覚性」を促す発問や気づきが幼児期から徐々に小学校1年生にかけて増えていくこと、幼児期から徐々に発問や気づきの種類が増え「指導範囲」が拡張したり、子供の読みの力が伸長したりすること、発問や問いが幼児期から徐々に難易度が上がっていく「系統性」が見られることを明らかにしたことである。第三に、これら一連の研究成果から、幼小の双方の読むことの指導における課題を検討し、それぞれの特徴的な環境構成と指導内容から子どもの問いや気づきを導き、読みの力を育む幼児教育から小学校教育への接続の時期の読むことの指導の試案を提出したことである。

今後の課題は、第一にカリキュラム論の観点から、接続の時期の読むことの指導の試案について、幼小双方の教師による実践的検討が求められること、第二に読者反応理論のような社会文化的学习理論の観点から、教師・子供の経験や既有知識等の差異による読みの様相を、詳細な事例分析を通して明らかにすること、第三に、事例の典型性や知見の妥当性を検証する観点から、さらに多くの事例検討や、教師・子供に対する意識調査等の量的な分析を組み合わせたトライアングレーションを行い、さらに研究を発展させたいと考える。

表 幼小の接続の時期における読むことの指導の試案

| 施設種別 | | 幼稚園 | 接続の時期 | 小学校 |
|---------|-----------|---------------|-------------------------|-------------------------|
| 環境構成的要素 | テキスト | 絵本(共同) | ○ | |
| | | 教科書(個別) | | ○ |
| | 読み方 | 教師の読み聞かせ | ○ | |
| | | 教師と子どもで斉唱する | ○ | |
| | | 教師の範読 | | ○ |
| | | 子供による音読 | | ○ |
| | | 子供による黙読 | ○ ※一例にあり | ○ |
| | 教材・教具 | 共同 | ○ ※少ない | ○ |
| | | 個別 | | ○ |
| | | なし | ○ | |
| | 位置関係 | 互いに距離が近い | ○ | |
| | | 互いに距離が遠い | | ○ |
| | 活動の展開 | 読みは1回のみ | ○ | |
| | | 読みを繰り返す | ○ | ○ ※1時間内(単元内)で読みを繰り返す |
| | | 読みの前または後に活動あり | ○ ※言語活動を取り入れる | ○ |
| 言語指導的要素 | 発問や気づきの起点 | 教師起点単線型 | | ○ |
| | | 子供起点波及型 | ○ | ○ |
| | | 教師起点波及型 | ○ | |
| | 教師の発問 | 回数多い | ○ ※徐々に増やす | ○ |
| | | 回数少ない | ○ ※研究2で多い | |
| | | 発問読前 | ○ ※学びの目的意識 | ○ |
| | | 発問読中 | ○ | |
| | | 発問読後 | ○ ※読みの交流 ※学びの振り返り | ○ |
| | | | | |
| | 子供の問い・気づき | 回数多い | ○ ※子供の問いを取り上げて読みに生かす | |
| | | 回数少ない | | ○ |
| | | 問い・気づき読前 | | ○ |
| | | 問い・気づき読中 | ○ | |
| | | 問い・気づき読後 | ○ | ○ |
| | | 観察されず | | ○ |

2. 論文審査の結果の要旨

第 1 回目の審査会は、2021 年 11 月 5 日 18 時 30 分から開催された。提出された論文から、以下の点において博士論文として価値ある内容であることが確認された。まず、第一に、幼児教育と小学校教育の各々の指導の特徴を同一絵本の読み聞かせと国語の授業に着目して比較分析している。どちらも絵本という「もの」に共同注視することは共通だが、それが幼児教育では物理的にも同一の絵本への注目であり、小学校 1 年生では同一絵本またはその拡大への注目とともに教科書などを各自が持ってそれぞれの物理的には別だが内容的には同一のものへの注目が起きており、より抽象性の高い共同注意が成り立っていた。その具体的な様相を丁寧にそれぞれ 10 個程度の実践から抽出し、その特徴から出てくる指導の具体的な違いがそれぞれの時期の教育としての基本的なあり方の違いに基づくことが見出されていた。さらにそこに共通性や発展性が見られ、幼児教育と小学校教育の繋がりを自覚性、指導範囲、系統性の徐々に進む拡大として明確化していた。このような実証的な検討成果は、従来の幼児教育と小学校教育がそれぞれの時期の特徴を理念的にどうつながるかということを超えておらず、実践例を断片的に挙げることに留まっていた同専門分野領域の先行研究に対して、初めて、実証的な裏付けを行ったこと、またその理論的な精密化を成し遂げたという意味で大いに評価できるものであった。

しかしながら、審査者間において博士論文として本研究内容が学術的価値をどのように位置づけていくものであるのか、理論的意義や社会的意義を踏まえた論述の形式を求めていくこと、さらには、先行研究からの本研究の位置づけと研究 1～3、総合的考察に至るまでの全体の論旨を明確にし、論じる形式の必要性が問われた。また、①国内並びに海外の研究の動向調査と整理の必要性、②研究 3 の多文化比較研究については極めて浅い結果と考察となっており、日本における言葉の指導のあり方を相対的な視点での考察を加筆、③日本における読みの水準を明確に示し、総合考察を深化させるという大きく 3 点とその他審査者からの細かな指摘事項について次回の審査までに加筆・修正することで第 2 回目の審査会に進むことが了承された。

第 2 回目の審査会は、2022 年 1 月 13 日 19 時から開催された。第 1 回目の審査で指摘され、求められていた多くの修正点を適切に修正していた。博士論文を執筆するにあたり、本論文の学術的価値として論じていきたい理論や研究結果に基づき、実証されたことを明確に示す形式となった。これまでには実施されてこなかった新しい研究方法や分析方法、新たな理論の構築や展開が整理され、さらにこれまでにはなかった学術的解釈や概念を生み出した経緯が論じられていた。関係する先行研究の状況やこれまでの関連研究の流れの中での本研究の位置づけをきちんと整理した内容が第一章で論述されていた。また、論文全体の構成として、一貫した構成と内容に近づいてきた。本研究の目的として立てた問いに対して研究 1～3 においてどのような仮説を立て検証し、結果が導かれた上で考察し、総合的な考察として現状の 3 つの研究からどのような結論と今後の課題を見出したのか、博士論文としてその骨子ができ、全体の論旨が見えてきた。図・表などが具体的になり、説明性の高い論述となった。前回の指摘事項をおおよそ反映しながら取り組んでいたものと捉えられた。その上で、さらなる修正として、研究 1,2 の研究方法の手続きとして、①対象となる

幼稚園・小学校の特性や選定の方法、調査時期の理由など分析に関わる要素の記述が不明確なため、分析や結果に関わるこれらの事項について修正すること、②研究1～3における考察部分では、より具体的に事例場面から捉える解釈が必要なため、考察で論じている内容の特徴的な場面事例を加筆して論じること、③総合的考察として、従来の同専門領域における研究に対して、本研究が何を解明し、そこから導き出された今後の課題は何かを整理し、明確にする必要があるという大きく3点とその他審査者からの細かな指摘事項について次の審査までに加筆・修正することで最終の公開審査に進むことが了承された。

第三回目となる公開審査会は、2022年2月8日17時から開催された。第2回目の加筆・修正要求を適切に修正し、発表を行った。質疑では、研究手続きに関する方法論や幼稚園試案として提言された幼稚園と小学校の接続の時期に必要な指導内容について問われ、適切に答えた。審査委員からは、本論文全体として幼稚園と小学校の単純な比較として強調するような記述ではなく、分析として場面・状況をどのように捉え考察したのかを論述する必要があるのではないか、本論文の研究成果から導き出された幼稚園と小学校の接続の時期に必要とされる言葉の指導における環境設定と教材、指導内容などの試案が提言されているが、研究1～3の知見を踏まえ、どのようなことを根拠に提案されているのか明確に論述する必要があるのではないか、総合的考察では、日本の幼小接続の時期における言葉の指導のあり方を主軸に論じ、今後の課題においては多文化的な位置づけを行うための可能性を論議していくことが本論文にて掲げてきた問題に対する解明へとつながっていくのではないかと指摘がなされた。最終試験ではこれまでに取り組まれてきた経緯の中で修得してきた学力の確認を含め、公開審査での質問に的確に答えたことを認めた上で、最終の公開審査会にて指摘した事項の修正を求め、再度提出された論文を審査者全員が確認し、2022年2月24日に博士論文として合格と判定した。